

# ある新米山官の夢

松本寛喜

## Are you a forester?

入庁して間もない頃の私が、来日中の海外研修員から受けた最初の質問である。Forester という耳慣れない言葉に戸惑い、どのように答えたかは定かではないが、その言葉の斬新さとともに、自らを Forester と名乗る時の彼の威風堂々とした口調は今でもはっきりと憶えている。我が国でも古くから国有林に勤める職員は「山官」と自らを称し、己の仕事に対する自負心を惹起していた。彼が用いた Forester という言葉も、その背景には恐らく我々と同じ気持ちが秘められているに違いない。この共通の信念、国を越えて通じ合うものは一体どのようなものだろうか。

## 海外林業協力の現状

危機的状況にある開発途上国の森林、その姿が新聞・テレビ等で紹介されて久しい。毎年1千万 ha を超える森林がこの地球上から消滅しているということは、我々のように豊かな緑に囲まれたものにとっては理解しにくいことかもしれない。しかしながら森林の減少が世界各地で土壌の流出や砂漠化をもたらし、農業生産や生活環境に著しく悪影響を与えていることは事実であり、当事国にとっては緊急かつ重大な問題である。先に開かれた「第9回世界林業会議」や「森林に関する国際会議」においても、この問題に対して様々な討議が行われ、またその具体的な方策として国連食糧農業機関（FAO）は、途上国及び援助供与国が共同で熱帯林問題に取り組む熱帯林行動計画（TFAP）を採択し、各国にその実施を促している。

また我が国においても、プロジェクト方式の技術協力を中心として開発調査や開発協力、無償資金協力など、技術面・資金面での協力を進めている一方、TFAP への参画、FAO、ITTO などの国際機関に対する拠出を行っており、これらの協力は地道ではあるが着実に成果を上げている。

## 欲しい情報

しかしながらこれらの国際協力は、優れた効果を上げているにもかかわらず一般に知名度が低く、そのため協力の推進源となる世論づくりがいささか後手に回っている

---

MATSUMOTO, Hiroki : A Dream of a New Forester  
前橋営林局今市営林署

のではなかろうか。

開発途上国からの情報は先進国からのそれに比べて量・質の面ともに雲泥の差があり、正確な状況がつかみにくい。ましてや首都から数千キロも離れた農村の実態などはなおさらであろう。どのようにして森林が伐採され裸地化していくのか、なぜ彼らは木を伐り火を放つのか、そしてなぜ彼らは貪しく飢えているのか。おそらく答えはその国の政治や経済・歴史・社会習慣などを熟知しなければ得られないであろうし、民族・地域ごとにより細分化されるであろう。そのためこれら複雑な背景が存在しているにもかかわらず、一般的なイメージが「森林破壊」と単純化されやすいことから、誤った認識へと発展してしまう可能性が高い。「東南アジアの森林減少は日本の商社が元凶」といった批判や、住民不在の自然保護運動などは、同じ緑を想う気持ちを有しているにもかかわらず、その得た情報が偏っているために生じた悲しい誤解である。森林に対する関心が高まりつつある今こそ、正しい情報が最も必要とされよう。

### 縦横のつながり

ここで話をもとの Forester に戻そう。

これは私見であるが、一般的に Forester は縦の線に強いと思う。なぜなら国の中央から各地を眺めた際のグローバルな視点と、それぞれの地域から見た草の根レベルの視点を持ち合せているため、国全体の流れが垂直的に分析・判断できるからである。そこで、もしこの各国にある無数の縦の線を Forester という横の線でつなげたとしたら——広範な情報と幅広い人材・技術を有した素晴らしいネットワークが生まれるに違いない。

「木を伐るな、苗木を育てろ」と声高に叫ぶのはやさしい。しかしながら貪しい国が有する唯一の外貨獲得産業である商業伐採や、人口増加のために十分な休閑期間がとれない焼畑農業、食事や暖房のためにやむをえず行う盗伐などを前にしては、このスローガンは無力である。つまり、これら内部矛盾を抱えた問題に対しては、徹底した原因説明と綿密かつ恒久的な対策が不可欠であり、そこに必要とされるものは机上の論理ではなく、縦横のつながりを圧縮・ろ過して生まれた一滴の知恵である。そしてこの知恵を培養して世論へと発展させ、先進国・途上国ともに国内問題としてのプライオリティを上げることこそ、時間はかかるが最も着実な解決方法であろう。

### We Foresters

我が国は戦後、荒廃した山々を前にして、豊富な山村労働を集積して優れた人工林を築き上げた。この時「山官」は地域に交わりながら常にその進路を探り続けたが、その姿は現在の途上国に通じるところが多い。同じ立場にあり同じ目的を有するというこのつながりこそ「We Foresters」の宝であり、大切にしていきたいと思う。そして毎年来日する多くの研修員や、海外で知り合う多数の人々。その彼らと我々と同じ志を持ち、永続的なコミュニケーションを図れるとしたら、これほど素晴らしいことはない。私の海外林業協力に対する期待は、私自身の夢でもある。